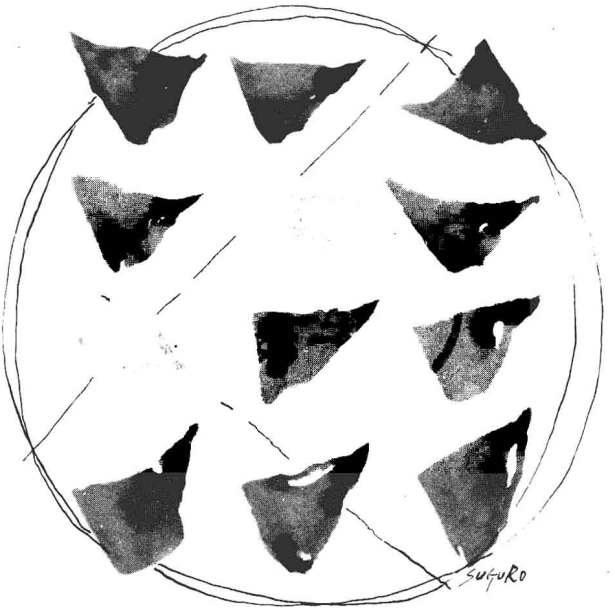
てつぺん野郎

石原慎太郎

てっぺん野郎

昇龍編



石原慎太郎

てっぺん野郎　昇龍編

一九六四年二月十　日　印刷
一九六四年二月十五日　発行

定価　三六〇円

著　者　石原慎太郎
装幀者　勝呂　忠
発行者　陶山　巌
印刷者　草刈　親雄
発行所　株式会社　集英社
東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三
振替　東京一五六五三
印刷・製本　中央精版

©1964　S. Ishihara　検印廃止

てっぺん野郎

昇龍編

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

1

トラックは刻一刻、目的地に向かって近づいていく。そして時計の針も運命を刻むごとく九時をさして近づいていった。

大川の橋を渡り、立て込んだ薄汚い街に入る。やがてトラックはある倉庫の前で止った。

首を出し闇にすかすと倉庫の壁に荒川商事第二倉庫とある。

「おうい、着いたぞ、大東商事だ」

吉が倉庫に向かって叫ぶと、人影が動き、

「待ってた。今開ける」

声と一緒に倉庫の扉が軋って開いた。

朗太は闇の中で辺りにきょろきょろ目を配った。

トラックがつづいて二台倉庫に入り、後で扉が閉められようとした時、

「待て、動くな」

闇の中で声がし、ばらばらと足音がかけ寄った。

朗太の横で迎えに出た荒川商事の社員が立ちすくむのがわかる。

建てものの明りを消しに走った一人の前に、

「動くな」

立ち塞がると、刑事は逆に壁のスウィッチを入れ、倉庫中の明りがついた。

「警察のものだ。トラックの積荷について闇行為の不審がある。責任者を一寸調べる」

痩せた中背の男がトラックの前にすすみ出た。柄に似ず大きな声だ。

トラックの運転手二人、荒川商事の社員二人、そして吉は青い顔をして立っている。

「あんたら、本当に警察の人か」

教えられた通り吉が言った。

やせた刑事は黙って頷きポケットから警察手帳をとり出してかかげて見せる。しながら横の連れに向かって眼で促す。横手から壁のスウィッチを入れたらしい男が同

じように手帳をかざして出た。
どうやら相手は二人だけらしい。朗太は思わずにやりとした。あの電話が効を奏したようだ。
にやりとした後、ごくりと唾を飲んだ。相手が二人だけとなれば、吉ではなくいよいよ朗太の出番だ。
「責任者は君か、積荷に関しての書類を見せてもらおう」
やせた方が吉に向かって近づいた。
荒川商事の社員は青ざめた顔で吉を見つめている。吉が観念したようにつばを吐いた時、
「書類はここです」
ちらと吉に目くばせし、朗太がすすみ出た。
「君が責任者か」
刑事はみんなを見比べるようにして確かめ直した。
「そうです」
「書類を見せろ」
「今。けどその前に一寸御説明したいことがあるんです。書類に関して、特別な事情がありましてね。よく説明を聞いて頂ければわかってもらえると思いますけれど」
「何だ」
「一寸ここじゃ。向こうの、倉庫番の部屋ででも。大丈夫、その間に逃げたりはしません。何なら外からこのまま倉庫に鍵をかけといて下さい」
「おいおい」
荒川商事の二人が言ったが、かまわず、
「すぐすみます、一寸待って下さい」
先に立って朗太はすたすた歩き出した。
言われた通り、刑事は外から倉庫の戸口にかんぬきを下してしまう。
倉庫番の部屋に入ると、
「とにかく言い訳の前に書類を見せたまえ」
言った刑事へ、
「今出します。その前にもう一度、おそれ入りますがお二人の身分証明書を見せて頂けませんか。さっきは私は横の方にいましたので、念のために」
刑事は少しむっとした顔で、それでも黙って警察手帳を出して示した。
「元山六蔵さんに、青木稔さんですね」
朗太は二人の名前を頭の中に記して覚え込んだ。
「書類はこれです」

懐に入れた札束をとり出し黙って机の上に置いた。今みたいに大きな札のない頃だから随分厚い束だ。
ぽかんとしている刑事に向かって、
「これが書類です」
「おい、君」
「二十万円あります。お一人に十万ずつ」
その頃の十万といえば、今と比べて大したものだ。
「君、これはどういうことだ」
小さくずんぐりした方が眼をむいて言う。
「ですからこれが書類です。つまり、あのトラックの積荷は完全に闇です。それを黙って見逃して頂きたいのです」
「何を言うんだ、おい、相手を誰と思っている」
「知ってます。本庁の経済第一課の刑事さんにお願いしているのです。そう無理なお願いとは思っていません。調べにいってみたら、そうじゃなかった。トラックなんぞ来なかった。と帰って報告すればすむことでしょう。あの電話は嘘のいたずらだったということで」
「あの電話？」
「そうです」
朗太はわざとにこにこ笑って見せた。
「実は、あの電話は私がかけたのです」
「き、君が?!」
「どういう訳だ」
「ですから、こうしてお目にかかりたくてです。つまり、この札束は、名刺の代りです。いかがです。これで見逃しては頂けませんか」
尚何か言おうとするやせっぽの方へ、
「簡単なことと思いますがね、聞き込みの電話が電話だったんだし。それにこの統制が、もともと大資本の一人もうけをこらしめるためにやられたものながら、結局弱いものいじめになっているのはお二人とも御承知でしょう。それを受けとって頂くのは人助けにもなると思いますよ」
「ふむ」
ちびの方が頷くともなしに言い、
「なるほどな」
片方を窺うように言った。
「あの電話をとったのは俺だがね、電話が電話だったから、こっちも余り当てにはしてなかった」

「課長は、いかんでもいいと言ったんだが」
引きとるように片方が言う。
朗太は何も言わずにこにこ笑って相手を見つめ、やがてそのままゆっくり深く頭を下げた。
その後、二人は一寸の間黙って見つめ合ったままでいた。
「みんなも待っていることですし、いかがでしょう。ひとつこの書類を通させて頂けませんか」
「しようがねえなあ」
やせた元山が青木を見返って言い、
「君には負けたよ。自分で自分をさす電話をかけて来るなんてのは新手だな」
二人の手が同時にのび、札束を掴むまではゆっくりだが、つかんだとなると電光石火その束を内ポケットに収い込んだ。
番人の部屋を出、倉庫の外の暗闇で向かい合うと、朗太が頭を下げると同時、二人の刑事は背を向け踵を返して闇の中に消えていった。
朗太は一人でかんぬきを外して中へ入った。
「どうだった」
青い顔をした荒川商事の社員が言う。朗太は黙って頷いて見せた。
「俺もかい」
訊いた吉へも黙って頷く。
今までいた刑事が消えていったのが、どうやら朗太のはからいのせいであるらしいと覚ると、相手の会社員も吉も、運転手までが一目おいたみたいに朗太を見た。
荷が下され、積荷の代金を現金で受けとると今度は吉をその護衛代りに据えて空のトラックに乗り込んだ。
出る前、相手に、
「明日もし、百トンの鋼材が今夜みたいに支障なく入るとしたらお宅では引き取るかね」
「百トン、しかし出来ますか」
「出来る、と思う。しかし明日の夜を外したら次のチャンスはないがね」
相手は一寸の間考えていたが、
「上と相談しなけりゃわからないが、もらえると思う。すぐにはけるロはある筈だ」
「よし、明日朝にでも相談しといてくれ。こっちからも人をやるから」

合図してトラックを出した。

「どうだった」

顔を見るなり叫んだ横山に黙って代金の現金を出した。

「七十二万、この内刑事に渡した分二十のたて換えをとって、残り五十の内、儲けが三十」

言いながら更にその内から十万抜いて吉の前にさし出した。

「これがあんたと、勘太さんへのお礼だ」

「こ、こんなに」

「そう。今夜だけじゃなく、これからもいろいろ手伝って頂くことがあります。帰ったらよろしく言っといて下さい」

「いや、留置所へ入らずにすむんなら、今夜くらいのことなら、手伝いと言えるかどうか知らねえが、何でもやりますよ、兄貴」

吉は急に朗太のことを兄貴と呼んで頭を下げると帰っていった。

「おい、あんな奴に十万も渡してどうするつもりだ」

今まであっ気にとられていた横山が、吉の姿が消えた後咎めて言った。

「大丈夫。採算はある。この儲けの残りの十万全部をあの経理の早川にやって、明日中に強引にでも百トン鋼材を買って荒川商事に売り込む。但し日付けは今夜ということにしてな。向こうもさばけると言っている」

「百トン？　いきなりどういうつもりだ」

「今夜のあの二人の刑事との取引きをフルに利用するのさ。連中は取引の額をろくに見ずにいった。あのトラック二台のつもりかも知れないが、実はこっちはもう百トンの荷物がその後へつづいてあったということさ。連中はとるべきものをとってしまった。もう返す訳にはいかないよ。百トンの口がばれても、日付けと会社の名前が知れれば連中は真っ青になってこれを抑えるよ。勿論その前にここからも連絡して万端準備をととのえてそれをもみ消すように頼む。頼むというより彼らだってそうしなけりゃなるまい」

「すると、刑事をだまして、その上脅すという訳か」

「ま、てっとり早く言えばそうだ。しかし、昨夜渡したものの上に、出すものは出す」

「なるほど、お前って奴は非道え野郎だな」
横山は改めてしげしげと朗太を見直す。朗太はただにこにこ笑って見せた。
実は昨夜、今夜の決行のことが決った後、朗太は思い出し、故郷を発つ間際一生の大事に際してのみ開いて見よと言って元心和尚の手渡したお守りを開いてみたのだ。
その一項に、
『――ひと度心に決めたるもの、たといそれ悪事なりともみだりに変えるべからず』
とあった。
今夜やり出したことが悪事かどうかは知らないが、法にひっかかることは確かだ。しかしやるならとことんまでやってやれと思った。
初めに冗談半分、警視庁全部を買収してやると言ったが、やるなら本気でそこまでいかなけりゃ駄目だ。
「よし、もう百トンの方は明日の朝からかけ廻って何とかする」
「とにかく、次の荷が今夜から離れすぎては駄目だ」
「わかった。しかし百トンというと儲けはどれくらいになる」
逆に横山が訊いた。
「ざっと八百万か」
「ふうむ、八百万か。よし、毒をくらわば皿までだ。一丁やるか」
横山は顔を真っ赤にして胸を張って見せた。
「その前に、今夜中に経理の早川を口説いた方がいい」
「よし、二人でいこう」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

2

眼の前に置かれた十万の札束を見て早川は青い顔になった。

「これはあんたの取り分です」

「どうして私がこれを」

「いいから、おとりなさい。それをとってもとらなくても、あなたはもう、我々と一緒の舟で出てしまったんだ。もう帰るにも帰れませんよ。いくところまでいかなくちゃ」

「そ、それはどういう意味です」

「今夜の商売の正しい訳を話しましょう」

聞き終った時、一旦真っ青になった早川の顔は次に真っ赤になり、そしてまた真っ白になった。

「あ、あんたらは非道い人だ。私には、か、家族がある。そ、そんなことは出来ない」

「しかし、あんたがここでそうやって手を引いても、僕らが黙っていると思いますか」

朗太はわざとにこにこして言った。

「そ、それぁどういうことです」

「つまりね、死なばもろともということですよ」

「そ、それはどういうことだ？」

「成功しても失敗してもあなたはもうわれわれの仲間だということです。もう賽子は投げられたんだ。今さらあんただけは退ろうったって退けませんよ。あんたがもし、もう一度我々の言うことをきいてくれなけりゃ、今夜のことをばらすまでです。今夜の仕事で、あなたがこの十万をとってもとらなくても社としての儲けは知れている。しかしいずれにしろあなたのやったことは一種の背任でしょう。動かした金の額の高低によらず、贓は贓ですな。僕らと一緒にね」

早川は真っ青になって唇をふるわしている。

「しかしあなたが危い橋を渡るのももう一度だけだ。さっき言ったように、今度の取引きに関しては、あの刑事二人はこっちに負い目がある。明日の夜中にこの荷を動

かせば、彼らも黙って目をつむるよりないでしょう。その後の仕事は明日の仕事の儲けでなんとかやります。もう一度だけだ」
「しかし、百トンというと、約三百万円、下手をするとうちの会社ならこの金でつぶれるよ」
「つぶれるならつぶしたらいい。放っときゃどうせつぶれるんだ」
横山が横で嘯くように言う。早川はうつ向いたままだった。
「三百万円といったって、経理の課長補佐のあんたならなんとかなる。それも一晩、たった一晩持ち出すだけで明日は元の金庫に収まる金だ。早川さん、ここが人生の運の賭け時だと思いますよ。生き延びるために右か左かをとるんじゃない。こいつをやらなければ、うちの会社は必ず遠からずつぶれるんだ。その先は街頭で石鹸を叩き売りすることになるかも知れない。僕がこんなことを言うのは生意気かも知らないが、早川さん、ここが男の度胸の一か八かじゃないですかね。一か八かというより、もうそのための布石は打ってあるんだ」
朗太は早川の前の十万円の札束を指して見せた。
「とにかく、明日をやるにしろしないにしろ、その金はとっておいて下さい」
早川はちらと札束を見ただけで手で膝を支えうつ向いたままぶるぶる震えている。
「どうだい、早川さん、あんただって今までにこんだけ面白え博打を打つのは初めてだろう。他の誰に頼るんじゃねえ、初めて俺たちが俺たちの腕でやって見せるんだ。他の連中だってこれで救われる」
半分脅すように横山が言った。
「し、しかし——」
横山が言った時、後の破れた唐紙ががらりと開いた。
「父ちゃん、おやりよ、考えていることはないじゃないか」
三人はぎょっとして振り返った。
寝巻きの上に羽織を羽織った早川の女房が敷居ににじるようにして坐っていた。
「な、なんだお前は」
「お客さんすみません。何となく様子が気になって悪いとは思いましたけど向こうで全部聞いてしまったんです」

朗太と横山は顔を見合わせた。
が、女房はかまわず、
「こちらの若い方がおっしゃる通りじゃないか。男の度胸のいる時じゃないの。あんた今までに一体男らしく何か自分でものを決心してやったことってあるのかい。いつも人の顔を気にしいしい、他人の後を金魚のふんみたいについて来ただけじゃないか」
「な、なにを言うんだ」
「本当よ。それも私や子供たちのためだというんなら御免なさい。でもそれなら私からお願いするわよ。私たちのためにも、今度は思い切ってやってごらんよ。一度くらい男らしく危い橋を渡ってごらんよ。放っておけばどっちにしてもつぶれる会社だってじゃないか。男におなりよ。父ちゃん！」
早川は頬の辺りをふるわせて聞いていた。そこまで細君が言っては、朗太も横山も最早口を出す余地もない。
「奥さんもああ言ってられる。頼むよ、早川さん」
「男におなりよ、私や子供のためなんかと言わずに、男らしく一か八かの勝負を張ってごらんよ。私は一生に一度、そんなあんたを見たかったんだよ。私にしたって、それが生き甲斐ってものよ」
早川の女房の声は半分泣いていた。
早川は膝に置いたズボンがくしゃくしゃになるまで固く握りしめていた。噛みしめた唇がひん曲って見える。
三人は息を呑んで彼を見守っていた。
「ようし」
地獄の底からでも響いて来るような声で早川はうめいた。彼はゆっくり顔を上げ、見比べるように朗太と横山と女房を見た。というより睨み据えた。
上下の歯を斜めに噛みしめ、今にもぎりぎり音をたてんばかりだ。その顔はまるで別人のよう、というより悪鬼みたいに真っ赤で眼がぎらぎら光っている。
「ようし！」
今度はうめくというより、低く、吠えるように言った。
「お、俺だって男だ。女房のこいつにそうまで言われ、いや、そうなんだ。その通りだ。俺だって、俺だって一度は男らしく滅茶滅茶に生きてやろうと思ったことだってあった。度胸が、度胸がないんじゃない。見てろ、見ててくれ。あんたらの言う通りだよ。ここまで追い込まれて、あんたらにそこまでさせて、それでも手を貸さず

にいるなんて男じゃない。私ぁやるよ。やりますよ。三百万円だろうと、千万円だろうと、その金は、会社ごと頂にいれても作って見せます」
「早川さん！」
「本当ですか！」
「本当だとも」
早川は、がばと二人の前に手をついた。
「二人とも、有りがとう。よく私を誘ってくれた。今度一度っきりになるか、つづくかは知らないが、私ぁこれで一生に一度、自分自身の力で自分や家族を養ってやることが出来る。有りがとう」
早川と一緒に女房までが畳に手をついた。
朗太と横山は思わず顔を見合わせ、慌てて相手と同じように畳に手をつき返した。
「たまげたじゃないか、眼が血走ってたよ」
「全く、ようしやるぞと言った時の顔は気でも違ったのかと思った」
「矢っ張り女のひと言というのは効くものだな」
早川の家から引き上げる帰り道二人はもう一度顔を見合わした。
「こうなると、是が非でも後の百トンをものにしなけりゃならない」
「鋼材の方は俺が何とか集める。しかし、それが旨く運び込めるかどうか」
「それは俺が何とかする」
「ようし」
二人は同時に言い、暗闇の中で立ち止ると向かい合い手を握り合った。
歩き出しかかり、朗太は立ち止った。
「どうした」
「いや、考えてみたら明日じゃ遅い。僕の方の手筈だけは今夜中にでも当って出来るだけ整えておく」
「しかし、もう一時過ぎだぞ」
「相手は遅い方がいいかも知れない」
「どこまでいく」
「新宿だ」
「これからか」
行き交う車もない。
「いや、歩いてでもいってみる」

「しかし、いやそうか」
「そうさ。あの早川さんだってああまで踏み切ったんだからな」
「よし、頼むぞ」
寝静まった夜道を朗太は一人で歩いた。
体はちっとも疲れてはいなかった。自分が久しぶりに活気を充満して動いているのを感じる。予科練時代に、空襲の下を弾を運んで走り廻った時のような熱いものが体中にある。
仰いだ星空が綺麗だ。朗太は殆ど上を向いて歩いた。自分が今目指したものに向かって少しずつだが、確実に歩いて近づいていくような実感があった。
街はもう寝静まっている。新宿の灯はまだ遠い。歩きながら、
「起きろうっ！」
朗太は怒鳴った。
「起きろうっ！　上杉朗太がやって来た」
怒鳴ると愉快だった。寝ている間にお前らの何もかもぶんどってしまうぞと怒鳴ってみたかった。
「英子さん、上条英子！　上杉朗太が今にいくぞ！」
反響が返った。勿論、英子は答えない。
代りに路地から出て来た酔っ払いが、
「おうい、気狂い」
「気狂いではない。俺は上杉朗太だ」
「なんだあっ」
坐り込んだ酔っ払いが怒鳴り返した。
やっと新宿に入った。街はもう大方睡っている。大通りを外れた裏通りにはちらほら灯は残っている。うろ覚えだったが、この前一度来た勘太の事務所のあるビルを捜して歩いた。
やっと捜し当てたビルの裏口から階段を上った。
一番上の階近くまで来た時、
「誰だあっ！」
上から声がかかった。
「止れえっ、誰だ」
「あのう、勘太さんいますか。その、一文字の兄貴は、僕は上杉朗太です」
踊り場の手すりの蔭から男の頭が覗いた。
「僕です」
男は尚身をのり出し、手にした懐中電灯で朗太を照ら

し出す。
「よし、上って来い」
朗太が上っていくと、手に日本刀をぶら下げた男が二人立っている。男はまだ険しい眼でじろじろ確かめるように朗太を見る。
「勘太さんは？」
「兄貴は、今病院にいる」
「どうかしたんですか」
「出入りで仲間が二人ばかり怪我をした。それを運んでった」
「出入りってのは、喧嘩ですか」
「喧嘩じゃない。戦争だ」
「戦争？」
「そう、祖国の国土防衛戦だ。日本対第三国」
男は今にも日本刀を抜きそうな顔をして言う。
「ここへ戻って来ますか」
「だろう」
「いや、それよりその病院へいってみます。急ぐ用事ですから」
男に道を教わってビルを出た。

言われた通りにいくと、表に小さな電灯をともしたしもたやのような医院まで来た。
表は閉ってい、裏に廻るともの蔭から人影が出て立ち塞がる。
「誰だ」
「あの、勘太さんは」
「なんだ、あんたか」
声は吉だ。
「勘太さんは？」
「中にいる」
「怪我は」
「兄貴は大丈夫です。俺が居ねえ間に出入りがあった」
促され裏口から入った。靴が一杯脱いである。
奥の座敷に、あちこちに繃帯をした男たちが一杯坐っていた。ガラス戸一つ距てたその更に奥で、
「痛ってってってっ！」
声がし、
「痛いのは当り前だ。生身を針で縫ってるんだ」
勘太の声がする。
「そ、そんなことを言ったって兄貴、痛いものは」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com